



私のメモ帳から

特許審査第一部長 小池 勇三

私は、昔から気づいたことを日記のようにメモしていますが、今回は、そのメモの中から問題のないところを修正して、ランダムに紹介します。終始一貫していないかも知れませんが、ひょっとしたら一つぐらいは皆様に興味を持って読める部分があるかもしれません。

私的なメモなので不適切部分を削除している間に、コーヒーブレイクが多くなってしまったことを先にお詫びしておきます。

最初は、上司に対して疑問を持っている人が読んで下さい。ほんとかんたと思う人も多いと思いますが、私は、その時は本音でメモにしています。

1. 上司をよく見よう、上司から学ぼう

物事に対して自分の上司はどのように対応するのか、しっかり見ておく事が重要です。それも必ず尊敬の念を持って見ることがとても重要です。どんな嫌われ者の上司であっても、学ぶところはあります。仕事の仕方、ものの考え方がしっかり勉強できます。ここでは、尊敬の念を持って見ることがポイントです。意外にその人がすばらしいことがわかってきます。自分より上の立場にいて様々な情報に接していること、自分より様々な経験をしていることは本当にすごいことです。嫌なやつほど出世する、ではありません。

2. 日頃から自分より一つ上のポストに就いたらどうするかを考えておこう

「1.上司をよく見よう……」に共通しますが、自分がそのポストにいたらどうするか、日頃から考えておく事

が重要です。私はいつも実践していたつもりですが、実際にそのポストに就くとかなり違った景色が見えてきますので、準備は怠りなくしておくべきです。あのポストはチョロいなと思っていてもいざ就いてみるとびっくりすることが一杯あります。自分の想像できる範囲で上のポストでの対応を日頃から考えておくことは、自分を伸ばすことにも繋がるいいトレーニングだと思います。

3. 審査長も同じ悩みを持っていた同志だった

私が、審査官の時、ある審査長に文句ばかりを言っていました。今はもう辞められた審査長が、「君には毎日竹槍でつつかれていたようだった。」と思い出を語られました。ちょっと恥ずかしい思いをしましたが、審査長といっても、皆さんと同様に審査官補、審査官、審判官と同じ経験、同じ思いをした同志です。その審査長は、きっと管理職として、審査官にはしっかり褒めよう、きちっと呵ろう、相談に乗ろう、部屋を明るくしよう、モチベーションを与えよう等と考えて行動していたのだと思いますが、審査官に伝わらなかったのかも知れません。審査長も悪い意味でのまじめ一本だけでは審査官はついてきません。ある時は面白く、ある時は素直に審査官に接すればよかったのかも知れません。少なくとも私は、今思えば審査長に対しては、誤解が多かったように思います。

4. 他社と比べて審査部の管理職は？

審査官の中には、審査部の管理職に不満を言っている人がいます。部下が管理職を批判するのは世の中の常な

5. 他室へ興味を持ちましょう

ので特に問題はないと思いますが、これに関してびっくりすることがありました。特許庁の実態をヒヤリングした人事専門のコンサルタントと雑談した時のことです。彼らは、特許庁の管理職に対する感想として、「今まで多くの会社で管理職にインタビューしてきましたが、これほど部下を思っている大勢の管理職に会ったのは初めてです。」と、また、「できれば私たちも特許庁に入りたくらいです。」と漏らしていたのです。審査官が聞いたらびっくりするかもしれませんが、たぶん本当のことだと思います。この話は、管理職の方にとっては、何となく理解できると思います。今の管理職も自分の当時に不満があって、その思いで、現状をよりよくしたいと思っているのだと思います。それがコンサルタントのインタビューで表面にでてきたのです。これは、不満を持っている皆さんが、将来管理職になった時のことを考えると容易に想像がつくでしょう。みんな特許庁の人は、ああだ、こうだ考えることは人一倍なのだろうと思います。しかし、直接的なラインではない関係では、審査官へは伝わる機会が少ないのでしょうか。たまになにかすると、むしろ逆に伝わっているかも知れません。

審査官も管理職もみんな同じ思いを経験しています。色々不満に思っている審査官も管理職になれば同じ事になるかも知れません。話しかけること、呵ること、褒めること、なんでもお互い遠慮してはいけないのだと思います。私もまだまだ発展途上です。

パキスタンで大統領暗殺事件に遭遇した。

尿素肥料プラントの融資の件でパキスタン出張中に、大統領暗殺事件に出くわしました。何が起るかかわからないということで、私は、政府の要人扱いを受け、8人の機関銃を持った軍隊に守られて行動することになりました。彼らとアフガン国境近くに行くと\$100程度で中古のバズーカ砲などが売っており、そのときも大統領暗殺は追尾型のバズーカ砲で行われたとの噂もありましたが、この国では、普通に買えるもののようなのでした。帰国のため空港へ行くと日本人VIP部屋で日本からやってきた大臣と2人きりにさせられ気まずい思いをしました。さらに、飛行機搭乗へも軍隊に守られてファーストクラスへ横付けされましたが、私は、エコノミーで行って行きましたので飛行機の中を先頭から後ろまで、スチュワーデスが見守る中、情けない思いでエコノミーシートへ移動したのを覚えています。

私のメモには、海外ニュースでよく見るように日常茶飯事で銃撃シーンがあることの実感と、どんなことがあってもとにかく落ち着いて行動することが重要だ、と書いてあります。



coffee break

私は、審査室を異動する度に不思議な思いをすることがありました。それは、親睦会に始まり、出張の仕方、面接の仕方、サーチ・起案の書き方までその部屋の雰囲気があったことです。審査官は、技術的なこともあり、人の部屋間の異動があまりないのが原因かもしれません。その部屋の昔からのしきたりが延々と守られていることがあり、それで良い面もありますが、いいことは他室から取り入れたほうが良いと思うこともあります。これは、審査官補から管理職まですべての人に言えることですが、例えば、受けているセミナー・研修、参加している学会、出張・面接等さらには、Fタームメンテ、技術動向調査、審査官協議、分類改正等情報は流されていますので、他室の仕事を気にして積極的に良い面は取り入れるようにしましょう。

6. 対話型検索外注の効用

まだまだ改善が必要な対話型検索外注ですが、対話型検索外注を導入して良い影響があったと思うことがあります。私は、昔から人柄についてメモしていますが、最近、快活になった人、理論的に話す人、積極的に話すようになった人が私のメモに多くリストアップされています。昔は、審査に没頭すると一日中人と話さないことも

あり、帰り際に「失礼します。」が、口が固まっていて出ない様な時さえありました。今は、知らないうちにサーチャーの方と話すことで頭の使っている部分が増えているのではないかと思います。話すことで記憶能力を刺激し、気がつかない間にサーチャーさんの技術も得られていますので、審査官の技術力もかなり上がっているのではないかと思います。

家庭は妻でもっている事が本当に分かったとき。

20年前、バンコク行きタイ航空の飛行機が突然爆発音とともにエンジンがシャットダウンし、急降下とダッチロールを2時間ほど繰り返しました。そのときはスチュワーデスも泣いているし、真剣に死を覚悟して遺書を書きました。その遺書の内容は妻には知らせていませんが、とにかく、子供をよろしくに始めて、妻にお願いすることばかりで、妻をいかに頼っていたかがわかる内容の遺書でした。

結局そのときはダッカ空港に胴体着陸をして、なんとか助かりました。バングラディシュは、偶然にも年に一度の救急事故訓練日で、ヨーロッパからアドバイザーが招待されていました。助かったから良かったものの、新聞には、実際の救助活動により、練習では得られない効果が上がった等と書かれていました。現地新聞は一面でしたが日本では小さなニュースでした。

人間は、本当に死に直面しないと自分の気持ちがわからないようです。

このとき偶然同乗した中国の政府幹部からは、よほど恐怖を味わったのでしょ、2年間に渡って、危機を共有した内容の歌が詠まれた掛軸が送られてきました。



coffee break

7. 分類協議

サーチ結果交換で自分のやった審査が世界へ情報発信される、分類協議で日本の分類が世界で使われる、こういう特許の世界にしたいと、昔は、多くの審査官が思っていました。今まさにそうなるうとしていますが、なかなか積極的に動いていきません。各国とも審査迅速処理という大きな圧力の中で審査官協議を行っているわけですから同じような状況だと思います。サーチ結果交換、分類調和のような出願人にとっても重要、審査官にとっても重要なプロジェクトは、審査官の仕事の中の重要な一つであることを明確にして、積極的に推進できるようにならなければいけないと思っています。

8. 何か言っても無駄だと思っけていても 言った方がいい

そんなこと言っても無駄だという口癖の審査官がいました。

もちろん何か言ってすぐには変わるとは思いませんが、過去、私も留学制度、語学研修、法律研修、技術研修等に不満を持っていました。しかし、同じ考えの仲間とみんな世直し、世直しと言って騒いでいる間に、そのおかげとはいいいませんがいろいろ変わってきていて随分良

くなって来ました。やっぱり言い続ければ必要なことは変わると思います。

先日、若手の勉強会から意見交換の申し出があり、モチベーションアップについて議論をしました。その際、彼らが作成したモチベーションアップ個別事例集を買いました。納得できる内容で管理職への期待が多く書かれていたので、審査長へ配布しました。こういう地道なことも少し経つと効果が現れるかも知れません。

9. 審査官の名は有名で とても感謝されています

地方の発明表彰等で表彰される企業の方と話すとき、審査官の名前が上げられて本当にお世話になっていますと言われます。今年の発明の日の表彰企業の方々からも多くの審査官名を立て続けに言われて、日頃の面接・アドバイス等について感謝されました。審査官と会うのを楽しみにしている方もおられました。多くの方々から感謝されている事を知らない審査官もいるかも知れませんが、ここでお知らせしておきます。審査官の仕事は中小・ベンチャー企業の方々からも喜ばれています。出願人と直結している審査官の仕事は感謝のされかたも直接的です。

10. 審査官の地方出張はいいことだ

皆さんも経験されているかも知れませんが、地方の会社を訪問すると特許証や発明表彰状が飾られており、会社の幹部の方が一生懸命に自社の発明について語られることがあります。そういうときに特許ってしみじみ地方の活性化に役立っているなと感じます。日頃の仕事の中では大量出願の審査に埋もれてしまって、特許に対する国民の喜びを感じる事ができないので、出張は自分の存在感を感じる上でも、とてもいいことだと思います。機会がある限り地方へ行ってみましょう。

フランスは、昔から生牡蠣が有名である。

30年前の話です。生牡蠣を食べるためにフランスの地方を訪れました。今では英語で「オイスター」で通じますが、当時は、英語はダメ、フランス語の「ユイトル」も発音が難しく通じません。ところが昔から日本人はグルメで、フランスの地方にまで牡蠣を食べに行ったとみえて日本語で「牡蠣」と言ったら、すぐに通じました。通行人から「牡蠣」と「トヨタ」は知っていると言われました。その後イタリア北部を訪れて生牡蠣を食べるつもりで「牡蠣」と言ったら、今度は「柿」が出てきました。

その後、日本語の言葉が他国と共通なのを知りました。インドネシアの疑問文は語尾に、「か?」を付けたり、強調で、「ね!」をつけたり、バングラディッシュの人力車が、「リキショ」だったり、韓国の「うどん、のりまき」などなど、言葉は興味を持って勉強すると身に付きやすいとのことなので、語学のはかどらない方は、語源に興味を持って勉強しましょう。



coffee break

11. 尊敬すべき人のために働く

審査官なりたてで本省に出向したとき、ある人と出会いました。気の合う人で、今思えば本省で一所懸命に働いたのは、その人のためもあったと思います。20数年経った今でも年に2回程会っています。今の私があるのもかなりの部分がこの人のおかげだと思っています。やはり、だれかのために働くという感覚も大事だと思います。身近なところにも尊敬すべき人が一杯います。カリスマ審査官を是非見つけて下さい。人を尊敬することは仕事をしていく上でも、人生の上でも本当に重要なことだと思います。

12. 採用担当者は、採用した後も声をかけよう

いろんな仕事の中で、審査以外では、採用に関わる仕事がいちばん思い出に残りますし、面白くもあります。私も、随分採用に関わってきました。面接の時は一生懸命に質問をしますが、少しの時間では事実はなかなかわかりません。ただ、一番感じるのは、どの人も何回も会っている間にすごく成長してきます。ということは、入ってから同様に接していれば、もっともっと成長する人も一杯いるわけです。採用担当者と採用に関わった人の重要な仕事の一つは、入庁後も声をかけることだと思います。

先日、私が採用に関わった若手の審査官達から意見交換を申し込まれました。その中でも「一声の重要性」を言っている審査官がいました。

13. 任期付き審査官採用

2年間任期付きの採用を経験して一番印象に残ったことは、面接時に応募者の話に聞き入ってしまうことが非常に多かったことです。会社の技術開発部、知財部の仕事に始まって、吸収合併やリストラの話まで、生の経験を語られると、私もついめり込んで聞いてしまいます。いろんな経験をされた方が、今までの審査官と一緒に交わりながら仕事をすることはお互いにいい影響を及ぼすのではないかと思います。

EPOでは社会経験が重視されていますし、日本でも審査官は現場をもっと知ってください、と出願人からいわれることもありますから、分類付けや協議を通じてみんなで議論をすることは非常に有益だと思います。違った経験を持った人が交わるのは、仕事では当業者としての立派な審査が実現され、人間的な面でもお互いに影響して幅ができていくのではないのでしょうか。

14. 官補の時代の目はどこへ?

昔、庁のある幹部が、入庁したときはほんとに元気で目が爛々と輝いていた人が、数年たって審査官になったとき、どうも元気が無くなってしまっている人がいる、と言っていました。その当時の人は、何とかしなければと思い、入庁前に何回も一堂に会する機会を作り、入庁後も幹部との意見交換する機会を設け、少しでも目の輝きを維持することに勤めました。その昔、私たちの時代には、そういう意見交換は何もありませんでした。

確かに、幹部と意見交換したからと言って、どんな効果があるのかと言う人も多いでしょうが、経験の違いからか、たまに「目から鱗」状態になることがあります。官補時代の目が維持できれば、20年後には、すごい審査官になることは間違いないと思います。

インドの古い慣習はITが変える？

デカン高原をアンバサダーというインド製の車で走っていました。気温は50℃を超えておりエアコンは効きません。日本人の相棒が車の中であまりの熱にやられてしまったので、少し木陰で休むことにしました。同行者のインド人がとても大きなマンゴをくれました。端から食べていると牛が2頭やってきました。逃げようとする、そのインド人が「とにかく動くな、牛を脅かすな。」と言いました。牛たちは私のマンゴの反対の端から食べ始めました。インド人は大丈夫といいましたが、牛とはじめて口を合わせました。それも2頭と。

今も、インドには我々が想像できない古い制度が残っています。最近のインドの状況について知る機会がありましたが、IT技術のすごさには目を見張るものがあります。たぶん古い制度を打破、または飛び越えるための道具がインドではITなのだと思います。



coffee break

15. 審査の施策の多くは 審査官が作り上げている

私が審査長時代の事です。審査官の多くが庁の施策について不満を持っていることを知りました。この原因の一つは、施策の背景が理解されていないことだろうと思いました。背景を説明すると何とか理解が得られます。ある条件下で、ある目的のために施策を作るとどんな審査官も同じような施策にたどり着きます。実際に、審査

部の施策も結構若手審査官のアイデアからでたものも多いと思います。できた施策のみを見ると納得がなかなかいきません。したがって、施策の背景とそこに至った議論の経緯をできるだけ審査官に話すような機会を設けることはもちろんのこと、グループ長会議やグループ会議でも議論の口火を切れるようにしておくことは大変重要だと感じています。今は、特に、そういう環境が必要だと思います。

16. 先輩管理職からの言葉

審査部の管理職になって、部屋全体をどう運営するのが悩んでいるとき、ある審査長から、「在任中に、一人でも横を向いて、やる気を失っている審査官にモチベーションを与えられれば、本当に素晴らしい管理職である。」と言われてすごく納得するとともにスッキリしたことがありました。管理職は人間的な幅も必要とされ、あたりまえですが、仕事仕事だけでは審査室の運営はうまくできないし、いろんな人がいるわけだから部屋全体を一気にうまく運営できる事は無いと考えるようにしました。

17. 自己の評価は、自分本来の実力より 2、3割高く評価するらしい

昔から自分の評価に満足がいなくて不満を漏らす人がいます。サラリーマンでも飲み屋で不満を言っている人をよく見かけます。物の本によれば、一般的に、自己については、2、3割高く評価することなので自己評価の2、3割減までの人事異動については、納得して仕事に当たる方が気持ちよく毎日が過ごせるかも知れません。

8月に、ある勉強会の人たちから評価について意見交換を求められました。いろ



coffee break

中国のマオタイ酒の産地では、マオタイ酒は買えなかった。

中国の貴州省へ交渉に出かけることになりました。ついでに有名なマオタイ酒が買えると思い、生産されている唯一の酒蔵を訪れましたが、マオタイ酒は買えませんでした。マオタイ酒は、すべて北京へ持って行かれてしまうとのことでした。その夜、貴州省の知事さんとの食事の席で、小さなマオタイ酒が2本出されました。注がれるまま、さらに、手酌でほとんど飲んでしまいました。それに気づいた知事さんが、今日は「かんべい」の数が少ないとショックを受けていました。私は、マオタイ酒よりスッポンの姿煮のスープが貴重だと思いましたが、スープは何倍でもおかわりできました。仕事の面では、交渉上の国柄の違いがメモ帳に多く残っています。

中国も知的財産権制度でいろんな改正が行われようとしています。国柄の違いが根底にあり、説明や字面だけでは理解されない部分が多いでしょうから、いろんな例を示すことが重要ではないかと思えます。これは、中国に限った話ではなく、我々が議論するときも経験の差などで物事に対する理解がまったく違う場合があるので、分かって貰うためにはいろんな観点からの説明を用意しておくことが重要だと思います。

んな意見が出ましたが、思いに相違は無いと感じられました。今後も顔を合わせて話すことはちょっとしたニュアンスの違いもよく分かるので積極的に行っていこうと思います。

18. 審査部は人がすべてだ

審査部には、基準があり、取り組みがあり、施策があり、運用があり、等々いろんな事がありますが、なにはともあれ人がすべてです。人が抜けたり入ったり病気をしたり、出張をしたり等々人が少しでも変化すれば、仕事に大きく影響して部屋の運営が難しくなります。指導審査官も、グループ長も、審査長も、人の影響をどう処理するか、人の能力をどう見抜くか、人のやる気をどう維持するか等々、人絡みのことが一番大事です。とにかく審査部は人がすべてで動いています。

19. 特許庁へ入庁して一番感動した日は、初めて審決を書いた前の日でした

入庁して、興奮して寝られなかったことがあります。皆さんは信じられないかもしれませんが、それは、いわゆるローテンション時代の話で、合議が終わって拒絶査定不服審判2件について2審決をはじめて書く前の日でした。

海外出張

経済協力で海外出張したときのメモには冗談のようなことが色々書いてあります。最初は、政府の私の仕事相手（その国の技術者NO1）は、4日前に刑務所から出てきた人でした。彼は、開口一番「金は、国ではなく私に貸せば4倍にしてやる。」と、私に言ってきました。次に、自動車を借りました。その運転手がスピードを急に上げはじめたので、途上国ではよくあることだと思っていたら、振り向いた運転手の目は真赤でした。ハッシッシ（大麻の一種）が一杯に入っていました。次に、検問があり、自動車のトランクからウイスキーを没収されてその場で割られたように思いましたが、5分後同じ警察官がバイクで追いかけてきて、没収したウイスキーを100ドルで買わないかと話を持ちかけてきました。

私にとっては理解しがたいことでしたが、その当時では、その国では普通のことなのでしょう。

審査部にとっては普通のこと、外から見たら異常な事があるかも知れません。たまには第三者的に自分の仕事を眺めて見ましょう。



coffee break

た。どうして気が高ぶったのか今考えてみると、注目案件だった等いろんな理由があったと思いますが、一番の理由は、合議での経験だったように思います。みんなで侃々諤々の議論をしたこと、最後には、合議メンバーが私にうまく審決を書けるように一生懸命アドバイスをしてくれたこと等、今まで審査部では味わったことのない新鮮な感覚を味わったからだと思います。それに、しっかりした審決を書いて答えようとした責任感が気を高ぶらせたのではないかと思います。今では、審査部は、普通に協議がありますが、しっかり議論して下さい。得るものが一杯あると思います。

20. 経験が人を成長させていく

例えば、一人目の子育てと、2人目の子育てでは雲泥の差があると言われていています。経験を積んだ2人目は、先が読めるせいか余裕の子育てができます。

例えば、独身の時は、人の気持ちを無視して、ずばずば言うし、仕事上の指摘の仕方もとげとげしかつたのに、結婚した後は、落ち着いたせいか、非常に理屈がわかる人になる場合があります。

妻の仕事（家庭の仕事）はたいした仕事でないと思っ
ていて、それで奥さんとうまくいっていなかった夫が、自分で家事を長期間経験した後、妻に対する理解が急に深まる場合もあります。

いずれにしても経験が人を大きくしていきます。仕事も同様だ
と思います。

自分の意見の大半は、自分自信の経験から出てくるものです。従って、仕事でもいろんな経験をすれば、世の中が見えてくることもあります。とにかくプライベートも、仕事も、進んで経験をするようにしましょう。経験のない人の意見は、薄っぺらで聞いている他人は何も言わないけれど多くを見抜いていることある
と思います。

麻薬密輸業者とまちがえられた。

赤パスポートで東南アジアを転々とした帰国の際、日本の税関で鞆の中身をチェックされました。石でできた壺をおみやげで買ってきたのですが、鞆の中で壺の一部が粉々になって丁度壺の中に白い粉が貯まっていた。税関吏が「これはなんですか」と強く聞いたので、本当に何かわからなかったので「ぼーっ。」としていると、彼は、「においますね。」と意味深な顔で言いました。意味がわからなくて、そうこうしているうちに税関吏が集まってきて人だかりができてしまいました。白い粉が麻薬と間違えられたとわかったのはだいぶ経ってからでした。結局、間違いだとわかったのですが、今度は、同じ税関吏が、「他に何か持っていますか」と聞いたので、「子供へのおみやげでカブトムシ等昆虫を持っている。」と答えたら、「問題ないです。行って良いですよ。」と言うので出口へ向かいました。少し経つと、また彼が追いかけてきました。「蝶々は持っていませんよね。」と聞いてきました。実は、マレーシアの店で強く買うことを進められた蝶々の大きな標本を持っていたので結局税関取調室に連れて行かれました。勤められて買った蝶々がワシントン条約の対象の蝶々だったので標本のど真ん中の蝶が取り上げられて間の抜けた標本になってしまいました。最終的に結果を出した、まじめな彼は、新人の税関吏と言うことでした。

新人審査官もこんな感じだと思うと急に彼に好感が持てました。



coffee break

21. 今真剣に悩んでいる事も 時が解決してくれるかも？

ペーパーレスではなく、まだ紙の時代でしたが、スライダックの間で、指に消しゴムを挟んで、紙公報をめくっているときでした。自分の仕事をしている姿に涙がこみ上げてきた事がありました。なぜか分かりませんが、なにか悔めな気持ちになったのではないのでしょうか。そのときは審査・審判業務の意義や深み、大きく言えば国民の特許庁に対する期待などに気づくことができなかったのだと思います。ところが、20年ぐら経ってみると、審査官の立派な起案や、審決、判決でのやりとりなどに触れたり、また、技術研修、出張やコンタクトでの意見交換等をしていると、特許の奥の深さを感じるが多くなりました。本当にこの役所に入って良かったと思うようになりました。同窓会で他省庁に勤めている同級生と仕事の話をしていても理系の私にとっては実態がはっきりしている特許の仕事の方がしっくりくるように思います。人それぞれですが、仕事の悩み事は、ちょっと経験のある上の人に相談してみるか、ひょっとしたら自分が経験することによって単純に時間が解決してくれるかも知れません。

入庁したときに自分を取り巻いている制度は昔からあった訳ではありません。いろんな人の努力によって修正

されてきました。これからも改善されていきます。

最近、ある部長が辞める時に、「16年間の審査の経験が私の宝です。」と締めくくられました。今の私には本当に理解できるし、本当に納得のいく言葉でした。(了)

まだ、メモ帳にいっぱいメモがありますが、無駄な掲載になるのでこれで終わりにします。好き勝手に書きましたが、一つぐらい「同感」と感じる部分があれば良かったと思います。

profile

小池 勇三(こいけ ゆうぞう)

昭和51年 特許庁入庁
平成7年 検索情報開発室長
平成11年 特許情報管理室長
平成12年 国際課長
平成13年 特許審査第1部上席審査長
平成15年 審判課長
平成16年 特許審査第1部首席審査長
平成17年 現職